西洋古典籍の世界

布野真秀　上村千尋
（学術情報課）

西洋古典籍について

二〇〇四年の映画『デイ・アフター・トゥモロー』に、図書館に避難した主人公たちが寒さを凌ぐため本を燃やすシーンがあります。次々に燃やされる本の中で唯一難を逃れたのが「グーテンベルク聖書」でした。中世以来、本といえば手書きで一冊一冊書き写した「写本」だった中、「グーテンベルク聖書」に始まる活版印刷術が一五世紀に登場したことは、まさに画期的なできごとだったといえます。

西洋古典籍とは、一八、一九世紀までにヨーロッパで作られた本のことです。なかでも活版印刷術の登場から一五〇〇年一二月三一日までに印刷された初期の活版印刷本は「インキュナブラ incunabula」、またインキュナブラ時代から一八世紀までの手作業で印刷されたものは「手引き印刷本 hand press book」とよばれ、世界的にも貴重書として扱われています。

東京外国語大学にある西洋古典籍

それでは、東京外国語大学附属図書館所蔵の西洋古典籍のうち『De republica Atheniensium』（V/231/2）を例にして、その特徴を見てみましょう。

『De republica Atheniensium』は、Carlo Sigonio というイタリアの人文学者によって著された歴史書で、一五六五年に出版されています。

タイトルページ（図1）には、著者名等の出版情報と一緒に「プリンターズ・マーク Printer's Device」という印刷所の商標が印刷されています。このデザインは印刷者によって異なり、本の出版地や出版年を知る手がかりになります。このデザイン（蛇・雲・手）を一六世紀にイタリアで刊行された本のデータベース「Edit16（http://edit16.iccu.sbn.it/）」で調べてみると、Vincenzo Valgrisi という印刷者が使っていたマークであることがわかります。

図1　タイトルページ

タイトルページが登場するのは一六世紀からで、それ以前には、出版情報は「コロフォン colophon」という本の最後のページに書かれるか、あるいはまったく記されませんでした。そのため、このプリンターズ・マークによって出版情報を特定することが重要なのです。

また西洋古典籍は写本を模したものを作るところから始まったため、現代の図書と違う様々な特徴があります。本文（図2）の活字に注目してみると、連字や縮約形など独特な活字形が存在します。これは、原稿となった写本の文字の形をそのまま活字にしようとしたためです。例えば「グーテンベルク聖書」では、約三〇〇種の活字が用いられています。印刷者ごとに様々な活字が使用されたため、活字もまた印刷者を同定する手がかりとなります。

「ē」のように母音の上に「-」が付いた形は、後ろにmまたはnが省略されたことを意味します

折丁記号
図2　本文1ページ目

ページの右下にある「A2」という記号は、「折丁記号signature」というものです。印刷本は一枚の紙を折りたたんだ「折丁 quire」をいくつも重ねて糸でかがることで出来上がっています。この折丁を折る時に、正しい順番で折りたためるようにつけられたのが折丁記号なのです。ちなみに、本にページ付を印刷することは一六世紀後半に定着したとされています。本書では両方が印刷されているようです。

今度は装丁（図3）を見てみると、子牛の革（ヴェラム）でできた薄い表紙になっています。また、革ひもが本の表面に出てきています。この革ひもは、折丁を固定するためにつけられたものです。こうした形の装丁は「リンプ装」とよばれ、一六世紀に入って登場した新しい製本の方式です。また、革ひもの反対側にも穴が開いています。これは、本が開いてしまうのを防ぐため、別のひもを通して結んでいたと考えられます。

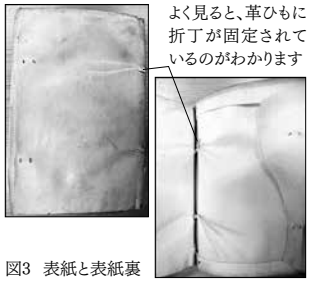

図3　表紙と表紙裏

西洋古典籍をもっと知るためのブックガイド

西洋古典籍についてごく簡単に説明してきましたが、いかがでしたでしょうか。興味がわいた方には、次の本がおすすめです。もちろん東京外国語大学附属図書館で読むことができます。

・アリソン・フーヴァー・バートレット『本を愛しすぎた男――本泥棒と古書店探偵と愛書狂』築地誠子訳、原書房、二〇一三年
・戸叶勝也『ヨーロッパの出版文化史』朗文堂、二〇〇四年
・貴田庄『西洋の書物工房――ロゼッタ・ストーンからモロッコ革の本まで』朝日新聞出版、二〇一四年
・ジュゼップ・カンブラス『西洋製本図鑑』市川恵里訳、雄松堂出版、二〇〇八年